環境を考えて どういうふうにやっているか

——特に東北地方の問題——

本田和子

「環境」という概念を「個人に何らかの影響を及ぼすべき外界の一部分」であると規定して考えを進めよう。

「個人に影響を及ぼす外界」には、いうまでもなく自然的なそれと、人間的・文化的なものとが含まれるわけである。

(1)東北地方の特殊条件。

東北地方の自然的条件を考えるとき、先ず第一に挙げられるのが冬の長さである。積雪量は表日本と裏日本では非常に異なり、山形・秋田などの雪国と、雪国の面影を持たない表日本の地域とがあるが、冬の長いことは全体に共通してみられ、この地域を他地方と区別する一つの特徴と考えられる。極端な表現を借りれば、一年は冬のためにあるといわれるくらいに、ようよう訪れた春・夏の季節が慌しくすぎて、十月中旬頃から寒さに対処しての生活が始まり、四月末、時には五月中旬までそれが続くのである。

「寒さ」という圧力の下にあって、動植物の生活も限定され、いわゆる「きびしい自然」の状態を呈する。そして農業その他の生産活動も、この自然に規定されて単調・不活潑となり易いため、「貧しい東北」という文化的条件が生み出されてくるわけである。

このような諸条件が人間とかかわり合いを持つとき、そこにさまざまな人間環境が形成される。そして、もしここで東北地方という一つの地域における幼児教育を、他の地域からきわ立たせて考えようとするならば、この自然のきびしさに規定されて生じた文化的・人間的環境の特殊性が問題とされ得るのではなかろうか。

もちろん、東北地方にも都市と農漁村の別があり、幼稚園にも公私のちがいがある。各々の施設は各々の異った物的・人的条件を持っている。そして、各々それに対処した計画を立て、それにふさわしい方法で日々の営みが展開されることは、保育が理論ではなく現実の営みである限り当然のことである。

それ故に、ここでは「ある園とある園の環境のちがいに対する対

処のしかた」といった事柄に重点をおくよりも、むしろ東北地方という一つのかたまりを与えられた環境として把握し、その上に立って考えを進めてみようとするのである。

(2)東北地方における幼児教育の問題。

東北地方に職を奉じる保育者達と東京近在に働く者とが集まって研究会を持った時、その席上で私共は東北地方の幼児教育の後進性を改めてはっきりと知らされた。幼児教育施設の絶対量が他地域に比して著しく少ないということ、それだけに幼児教育施設の存在意義も認められにくく、内容的にも低調なままに放置されがちであること、などである。

ここから、即ち「この後進性」が原因となって、この地域なるが故に特に配慮を要する多くの問題を引き出したわけである。

『後進性から生じている問題』

①施設・設備の貧困さ。

東北地区の後進性を示す一つとして、幼稚園の少なさ、特に公立の乏しさを挙げることが出来る。私立幼稚園はその経営を園児の保育料に頼るため、そして後進地域の故に極端に低額な保育料に甘んじなければならない多くの園にとってその経営は極めて困難である。35年度において、その保育料が月額三百円から千円前後までにちらばっている現状であれば、その範囲で有資格教員を揃えて園を運営しようとする場合、いきおい人件費に追われて、施設・設備・教具などは最低ぎりぎりの状態で我慢せざるを得ないわけである。

最低基準に達しない建物、ピアノを持たない園、幼児数ばかり異常に多く思いきって戸外の遊びを展開させることのむずかしい所も少なくない。このような条件が実際の保育にさまざまな制約を与えるわけであるが、結果として「余儀なく一斉保育を行なう」という形がとられやすいのである。もちろん、ある主張の下に一斉保育が行なわれる場合もある。しかし、一斉活動と一斉活動の間が僅かな自由遊びでつながれている背後には、「自由に製作活動をさせるには教材が乏しすぎる」「部屋が狭くて多種類の活動を同時に展開させることはできない」「隣の組で室内活動をしている時は、自由にそこを通りぬけられないため戸外へ出られない」などの制限に縛られて、やむなくさせられている場合も少なくないのである。部屋に入れたら最後、とにかくじっと一か所に集中させ坐らせておかなければならない、立ち上って手をひろげるスペースもないという状態のところもあってみれば、これもしかたのないことかもしれない。

このような状況下で、少しでもよい保育を行なおうとする場合、先ず第一に考えねばならないのは園全体で協力のできる動きである。各組が独自のカリキュラム・プログラムを持つ場合には、お互いの連絡がうまくとれていて乏しい空間や施材の利用がゆずり合いの上でスムースになされなければ、甚しい混乱を生み出すであろう。全体を統一した形のプログラムを持つ場合には、それが乏しい空間や乏しい設備にさえぎられて、幼児達にとって徒らに「待ち時間」の多いものとならないよう心掛けねばならない。ピアノが一台しか

なく、弾きこなせる人が一人しかないために、音楽リズム的な活動はどうしても一斉に合同保育という形になるが、ある組が動いている時、他の組は長時間坐って待たされているといったような状態に、とかく陥りがちなのは考慮すべき問題であろう。

教材の乏しさは廃物利用で補い得る。これも成人の観念では廃物であっても、幼児にとっては、それこそ一番適した新しい材料である場合が多い。成人の頭で判断して、あるものの代用に用いようという態度よりもむしろ、そのものが何の材料として生きるのかを、幼児自身の新鮮な感覚にゆだねた方が賢明な時も少なくないことを記憶すべきであろう。

人形のたんすを作るために持ちよってもらった空き箱が、車をつけられてダンプカーに変わってしまった例、色紙の代わりに持ってこさせた包み紙が、包み紙自体のおもしろさを楽しむ扱い方で用いられる例など、挙げていけば限りがない。

②両親その他の認識の啓蒙。

「幼稚園へ行けば文字や数が教えてもらえる」「幼稚園ではバレエやヴァイオリンなどの特殊な教育がしてもらえる」といった幼稚園教育の本質から逸れた期待があったり、「幼稚園はせめて三時半頃まで子どもをあずかってほしい」「幼稚園は子どものおもりを上手にしてくれればよいので、しつけに熱心な余り幼児がいやがるようでは困る」などといった要求が依然として瀕繁な現状である。これらの認識をたえざる啓蒙によって、幼稚園教育のあるべき姿を理解するところまでに引き上げていかなければ、真の保育は困難である。前近代的な批判を無視せず、それにひきずられずに、適切に対処していくことを工夫せねばならない。父母の会・祖父母の会を通しての啓蒙が他地区以上に必要なのである。

③小学校との関連に生じる問題。

全就学児の大半が施設保育経験児であるといった恵まれた地域も全国のあちこちにみられるが、東北地区における保育経験児の割合は極めて低い。したがって、小学校教育のスタートはやはり未経験児の上に基礎をおいてなされるため、「幼稚園経験児は扱いにくくなまいきで困る」といった小学校側からの声が依然として続いている。したがって、このような状態を考慮しての小学校への準備が必要となってくる。

幼稚園で養われた発表力が、しばしば入学後の邪魔な行動の一因となっていることを考えて、発表力と同時に「他人の話を落ちついて最後まで聞く力」の養成に力を注ぐとか、集団生活に慣れているといった点を生かして、よいリーダーシップを身につけさせておくことなど、その一例であろう。

『東北人のパーソナリティ』

東北人ということば及び東北人のパーソナリティ云々というような表現は、極めてあいまいであり主観的な色彩を帯びやすい。しかし、東北地方での対人間的な営みを考えるとき、漠然とした雲のようなものでありながら、どうしても無視し得ぬ力をもっておおいか

ぶさってくるのがこれであるといえよう。

一般的に東北人は閉鎖的であるとされる。そのこと自体には論議の余地があるとしても、表現力に乏しいことは確かである。自己の欲求・意志、特に感情の表出に極めて劣っているわけである。そして、使用される言語の特殊性がこれに拍車をかけて、他地域においては東北人の生活を益々閉鎖的なものとし、パーソナリティ自体をも閉ざされたものとしてしまいがちである。

保育の場において、これが地域社会を考慮する際の一つの問題としてとり上げられるといえよう。

表現力を養う訓練、それが単にことばによってのみではなく、情緒の表出と、行為とを伴っての全身的な表現力の養成が、考えられねばならない。

全体を規定する大きな要因である冬の長さを、ここで有効に活用すべきであろう。即ち、室内活動を余儀なくされるような冬の期間に、劇遊び・人形劇の演技などを中心にした保育を展開させることなど、その例である。聴衆の顔をみて話すことに抵抗を感じる幼児は案外多いものである。絵本のかげ、紙芝居の画面などに顔をかくせば、発表が容易になる幼児がある。このような事情を考慮に入れれば、全身をかくして人形に物を言わせる人形劇は、極めて効果的な活動であるといえよう。

ことばによる表現で問題となることの一つに方言のとり扱いがある。先に触れたように、この方言が表現力をはばむ一因でもあるから保育の場で考慮を要する事項といい得る。しかし、方言の矯正は非常に慎重を要し、かつ困難な問題である。集団生活及び集団内での言語生活への適応を主に考える時、むしろある程度まで方言を積極的に用いた方がより効果的である場合が多いからである。いつ頃まで方言の使用を許容し、いつ頃から矯正にウエイトをおいたらよいのか、矯正するとしたらその範囲と程度をどこにおくべきであろうか。学識的には、或いは恒例としては一応の基準が求められている。しかし、真に実証的な根拠を得るために、私共の今後の努力が要求されているのである。

『冬期の保健の問題』

冬が長く、寒さのきびしいこの地域で、冬を健康にすごすための配慮は忘れられないものの一つである。同時に、ストーブなどの暖房器具の安全で適切なとり扱いの指導が、より積極的にとり上げられねばならない。危険から守るための注意と同様に、一歩進んで正しくとり扱い得るための指導が考えられるべきであろう。お当番の幼児が責任をもって先生のお手伝いをし、ストーブに石炭を入れる役割をもつ、というようなやり方を効果的に行なっている例など、参考とすべきであろう。

日光を有効に利用すること、他地域では経験しにくい冬の自然の活用をかねて、晴れた日の活動はなるべく戸外で行なうことも東北地方の保育に欠くことのできない条件であると思われる。

（尚絅女学院短期大学）